日仏整形外科学会交換研修に参加して

大阪医科大学三島南病院　木澤　桃子（平成 22 年入局）

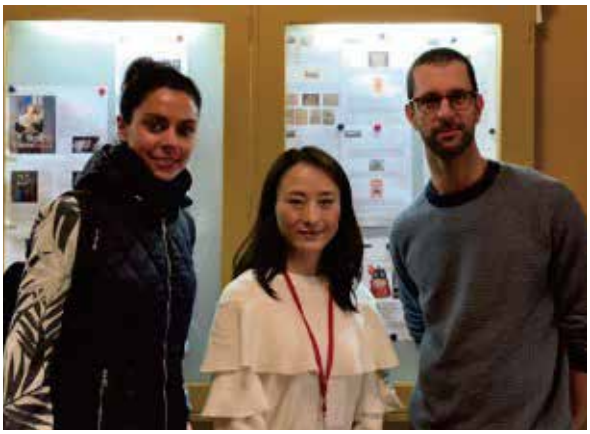
平成 31 年度の日仏整形外科学会交換研修制度で5月から6月中旬にかけての約2ヶ月間、France Palais Garnier 内にあるパリ・オペラ座バレエ団の診療所とHenri-Mondor 病院で臨床研修をさせて頂きました。

私は幼少期からクラシック・バレエを習っていたので昔からフランス文化への憧れを持っていた事とこれまでに沢山の同門の先生方がこの研修を使って渡仏されていたことが重なり、日仏交換研修への参加は整形外科に入局した頃からの私の夢でした。大学院で足の外科の観点からバレエダンサーの体を診るようになり、私の研究課題であるダンス医学を通してフランス整形外科との繋がりを持つことができてとても嬉しいです。また、パリに渡仏する前年の11 月頃からジレジョーヌ（黄色いベスト運動）が激化していることを日本にいる頃から心配していました。2 歳の息子と一緒に渡仏することを決意していたので研修先でうまくやっていけるかの心配に加え、子供との生活や幼稚園の状況などの不安や心配も重なり、沢山の方にお世話になり準備して臨みました。

France Palais Garnier - Opera National de Parisでの研修

世界トップクラスであり世界最古の国立バレエ学校を有するパリオペラ座バレエ団に付属しているダンサー専門のスポーツクリニックで研修しました。同バレエ団の帯同ドクターをされているDr. Barreau が行なっている運動器傷害の診断や治療を見学しました。彼女とは2016 年にスイスで開催された国際ダンス医科学研究会で初めて知り会ったのですが、当時は診療所も開設されたばかりで医療機材が何もない状態で診療をスタートしている状況であると聞いていたので、3 年が経ち、診察スペースや超音波機械、アスレチックリハビリテーションを目的としたピラティス機材や筋トレスペースを見たときは彼女のバイタリティの強さと実行力に感銘を受けました。パリ・オペラ座バレエ団には150 人のバレエ団員が所属しています。団員は厳しい昇級試験に基づいた階級社会で役職が決まり主役を任命されるのは、そのうちのたった10 名程のエトワールのみです。いつも素敵な笑顔で踊るダンサー達ですが、同じレッスンを受けている隣人は友人でありライバル。その陰には絶え間ない努力と怪我が付き物です。Dr. Barreau は1 人のダンサーに充分すぎる程の時間をかけて診察していました。ダンサーは肉体的にはアスリートである反面、精神的には芸術家であり非常にセンシティブな内面を持ち合わせています。それ故に、単純に運動器疾患としての診断を下し治療するだけでなく彼らが控えているステージの内容や役柄を把握し、どのような特徴の動きが多く含まれ、それにより生じやすい傷害を把握し彼らが納得するまで説明するのも大切な仕事です。午前中の診察が終了すると、午後からのリハーサルやレッスン、ゲネプロの様子等をチェックし注意すべきダンサーの状況を把握します。ガルニエ宮にはバレエダンサーの他にも約 2500 人の技術職人が働いているため全体のスケジュール管理が大変です。そのため、携帯電話用のアプリがあり画面に時間と演目、出演者等の詳細を確認することができます。また、ダンサーのヘルスケアをトータルサポートするためDr. Barreau を中心として理学療法士やトレーナー、柔道整復師を含む12 名からなる医療チームがあり、アスレチックリハビリテーションや栄養面、履物の

指導等の予防医学を含め普段の整形外科診療のアプローチだけではない特殊な健康管理が行われていました。また、Dr. Barreau も1歳児の母で働く母親としてお互いに共感できる事や気を遣い合える部分が多かった事もあり、仕事と育児の向き合い方や働き方など診察以外でも話し合える点が多く楽しく充実した時間を過ごせました。



左はBarreau 先生、右は理学療法士のBrunet 氏

ガルニエ宮正面

Hôpital Henri-Mondorでの整形外科研修

パリ市内に位置する国立大学に付属するHenri-Mondor 病院の整形外科教室で足の外科専門医であるDr. Piat に師事しました。フランス人にも多く見られる外反母趾の治療を中心とし外来診療及び手術、周術期管理を一環として見学させて頂きました。Dr. Piat はとてもフレンドリーな紳士で色々と気を遣ってくださいました。外反母趾矯正方法としては軽度から中等度変形症例にはChevron 法、重度変形にはScarf 法が行われていました。手術室入室から退室までの流れが非常にスムーズで麻酔の導入の際には前室で麻酔科医が局所静脈麻酔を組み合わせて行います。手術自体の手技も素早く正確で20 分程度で1 件が終了していました。また、術後に免荷はせず装具靴での全荷重を許可していました。即時荷重は日本人の私からすると生活面での負担が少なく良いと感じましたが、お洒落なパリジャンからするとネイルケアができないことや不恰好な装具は多少の不満があるようでした。患者側から見たフランス人の足の疾患や外科的治療に対する捉え方が日本とは少し異なり、文化的に医療への考え方の違いを知る事ができ視野が広がったように思います。

手術室にてPiat 先生と

朝のカンファレンス

パリでの生活

Dr. Barreau、Dr. Piat が迎え入れてくださり、紹介頂いた周囲のスタッフの方々も皆親切でフランス人の温かさを感じました。また、フランスでの生活は自分の世界観が変わる程に新鮮でした。幼い子連れでのパリ生活でしたので心配事は絶えませんでしたが、個人主義のパリジャンでもベビーカーを押していると信号の色に関わらず車は一時停止し、地下鉄でも手伝ってくれる方がいて、国策面だけでなく少子化を克服したフランスの子供に対する意識は日本人とは大きな違いがあるように感じました。

現在、世界中で新型コロナウィルスの感染拡大が続いています。フランスでは多くの方が亡くなり、ニュースでは変わり果てたパリの街並みが連日報道されており心を引き裂かれる思いです。1 日でも早くこの世界的流行が収束し、またフランスを訪れることができる日が来ることを心から願っています。

最後になりましたが、初めにこの研修を勧めてくださった藤原先生、大槻先生、快く送り出してくださった医局の先生方に心から感謝申し上げます。今回の経験が今後の糧になるよう精進致します。